Osaka University Knowledge Archive

Title	『聖アントワーヌの誘惑』覚書 : その二、ある未定稿をめぐって
Author(s)	平田, 靖
Citation	Gallia. 1971, 10-11, p. 250-261
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10000
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『聖アントワヌの誘惑』覚書

——その二，ある未定稿をめぐって——

平　田　　靖

ある作品の孕む深い「意図」，それを具体化しようとする表現方法としての「構成」を把握することは，作品理解に不可欠な作業であろう．そしてこの作業において，作品の成立過程の研究が重視されるのも当然であろう．何故なら，それこそ作家の「表現」との苦闘を証言するものであり，そこに立ち現われた「意図」と「表現」のギャップこそが，作家の精神のあり方をよく垣間見せてくれるものであろうからである．

ところで『聖アントワヌ』の場合，四半世紀にも及ぶその成立過程は，二つの完全草稿（1849，1856）と幾つかのプランによって，かなり詳しく知ることができる．しかも，その原型をなすと考えられる作品群の存在も早くから確認されていたところから，フローベールがこの作品に託した「意図」も既知の事項といえるだろう．

すなわち，悪魔による誘惑という構図のもとに書き上げられた≪孤独と欲望の書≫という指摘[1]を待つまでもなく，この作品の奥深い底流は，この作家のペシミスムに根ざしたものであることは容易に読みとれるであろう．

ただ筆者の興味は，この深い意図にもかかわらず，最終稿において，そこまでの「絶望」の常套的表現（悪魔の勝利）を払拭しようと試みたフローベールの内的葛藤にあるが[2]，この小文においては，「絶望」という誘惑のドラマの必然的帰結を絶対視することによっては決して納得しえない，ある未定稿につ

いて考察し，『聖アントワヌ』第三稿の寄って立つ基盤を考えてみたい．

I

問題の草稿は，プレイアード版『フローベール著作集』第一巻々末の註に載せられたものである[3]．補註者はこの草稿について手短かにしか解説を付していないが，それによれば，≪『誘惑』の数々の草稿の中に，ルイ・ベルトラン氏が次の文章を発見された．それは，『郊外のキリスト』と題することが出来るであろうが，宗教的良心に対する配慮のため，フローベールが，決定稿より削除したものである≫とされている．

ところで，極く小さな活字で一頁余のこの草稿は，『聖アントワヌ』の本文の終りに付された補註であり，削除が行われなければ，この興味深いエピソードが，そのままこの位置に置かれるかのような印象を与える．この小文はこの点に関する考察を目指しているが，まずはこの文章に目を通してみよう．

≪アントワヌにはもう何も聞えない．彼が耳をそばだてると，沈黙のしじまが一層大きくなるように思われ≫闇が彼を閉じこめる．そしてその闇が再びとけた時，そこには街が，家並が，人々の姿が，すなわち現代のパリに似た日常生活が現われる．彼らの中に，アントワヌは，イエスを見つける．彼は重い十字架を背負い，よろめきながら歩いている．しかし人々は無関心である．彼が十字架の重さに耐えきれず膝をついた時，集った人々は，彼にむかって罵りの声をあげ，果てには唾を吐きかけ，暴力さえふるう．

≪人はもうイエスを見ようとさえしない．彼が誰だかわからない．

彼は泥の中に倒れたまま動かず，冬の陽が彼の瀕死の目にさしこむ．

彼のまわりでは，日常生活が続けられる．車は彼に泥をかけ，売笑婦は彼に軽く触れ，白痴は通りすがりに笑いを，人殺しはその罪を，酔払いは反吐を，詩人は小唄を投げかける．沢山の人が，彼を踏みつけ，押しつぶす．――そしてついに舗道の上に，次第に脈搏の消えてゆくイエスの真紅の心臓しか見えなくなった時，聞えてきたものは，カルヴァリオの丘の時のあのおそろしい叫びではなく，かすかな吐息，虫の息だけであった．

闇が再び閉じる.

アントワヌ：「おそろしいことだ．神様，私は何も見なかったでしょう．（そうでなければ）後には何が残るというのでしょう.」

彼はうずくまる.≫

このエピソードの言わんとするところは明瞭である．≪後には何が残るというのでしょう≫（Que resterait-il?）という悲痛な叫びは，悪魔との争いに破れて涙を流すキリストを描いた初期の作品『死者の舞踏』[4]の一場面と，時の隔てをこえて共鳴するものである．

ところが，今私たちが読むことの出来る決定稿では，キリストの現われる場面は，結末，誘惑を脱したアントワヌの目に映じた，昇りくる太陽の中にである[5]．この百八十度にも異なるキリスト像は，簡単に置き換えられたのであろうか．まずこの草稿の占めるべき位置に関する疑問について，次いでこの削除の意味について考えてみよう．

II

この草稿の占めるべき位置は，補註の解説の不十分さの故に，まず検討されなければならない点であろう，何故なら，補註というものの慣用からいって，それは付された位置に関する注釈を補うものと考えられるからである[6]．

それならばこの削除されたエピソードは，フローベールの最初の考えでは，決定稿の末尾に差しはさまれる予定であったと考えるべきであろうか．しかしその推定に対する答は，否（ノン）である．何故なら，この草稿は，プレイアード版補註者の言うとおり，第二稿『聖アントワヌ』の存在を最初に発表したルイ・ベルトランによって発見されたのであるが，彼はその間の事情に触れた文章において，次のように述べているからである．

≪この未発表の断片は，1874年の決定稿に属するものであることは確かである．筆跡に加えて，新しい登場人物であるイラリオンが現われていることが，それを証拠立てている．この人物は前の二つの草稿には姿を見せな

いが，最終稿では重要な役どころを演じている．

フローベールは，そこに痛ましいが，稀有の美しさで，現代のパリの通りでのイエスの苦しみを描いている．[7]≫

つまり，プレイアード版の補註には，何故か省略されたイラリオンの登場が，この問いに有力な手懸りを与えてくれるからである．

実際『聖アントワヌ』決定稿では，この人物は聖者の誘惑の狂言まわしの役割をつとめているが，第五章に至り，そこまで扮し続けていたアントワヌの弟子の姿から悪魔へと変身し，聖者に対し最後の強力な誘惑へと自らのり出すのである[8]．この物語全体にあって，一つの圧巻となっている「変身」の後には，イラリオンは再び姿を見せないのであるから，彼に関する記述を含むこの草稿が，結末に位置することはほとんど不可能であろう．

又いま一つの仮定，つまり元来はこのエピソードでもって結びとする意図を，フローベールが持っていたと仮定してみよう．つまりイラリオンから悪魔への「変身」の重要性をドラマチックなまでにきわ立たせるために，いつかこの部分を現在の形へ改めたと考えられるだろう[9]．

しかしこの仮定も，次のプランの存在によって，その可能性が薄らいでしまうように思われる．

≪Ⅰ．風景，日輪，聖者の小屋，聖アントワヌの風貌．山．—Ⅱ．七大罪の幻影．—Ⅲ．科学．—Ⅳ．異端教開祖．—Ⅴ．神々．—Ⅵ．形而上学的誘惑，悪魔．—Ⅶ．死．—Ⅷ．死と淫蕩，虚無と生．—Ⅸ．スフィンクスとキマエラ．動物，自然．—Ⅹ．黎明となる，神徳．[10]≫

このプランは，三部構成をとる前二稿よりも七章より成る決定稿の構成により近く，それ故『聖アントワヌ』の最終の形を予告するものであるが，まず注目すべきは，結末を既にあけぼのの中の≪三対神徳≫と定めていることである．これは，前二稿の悪魔の勝利とは正反対の結末である．しかもこの結末の構想は，決定稿をいったん書き終えた1873年まで変らないことが知られているのであるから[11]，決して恣意的な構想ではないはずである．

又このプランのⅦからⅩまでを一章として第七章とすれば決定稿そのままとなる構想において，前二稿の痕跡をとどめる≪科学≫という登場人物がイラリ

オンに置きかわれば，全く新しい構成となる段階において，早くも結末は聖者を救うキリスト教の勝利であるのに対し，イラリオンは未だその原型を脱しえていないわけである．

とすれば，イラリオンの導入は聖者を勝たしめる結末を着想した時期より遡ることは考えられず，それ故イラリオンの登場するという問題の草稿が，結末に位置すべきであるとする仮定は信じがたくなる．

以上の考察から，この断片が決定稿で活されたとしても，それは決して結末にではなく，「変身」の章（第五章）より前でしかありえないことが，少なくとも考えられるであろう．

III

この断片に関する考察に，更に私見をつけ加えるならば，このエピソードは決定稿第五章，あの古今東西の神々が失墜してゆく様を描く章におさめられるものであろうと思われる．かつてチボーデが≪まったく統一のとれていない[12]≫と評したこの場面は，それにもかかわらずフローベルが力を入れて書きあげた箇所である．

ところで，この神々の失墜の場面は，次のやりとりで締めくくられている[13]．神々が通り過ぎ，静けさが帰って来た時，アントワヌが「みんな行ってしまった．」と言うのに対し，「俺が残っているぞ！」と答えるイラリオン＝悪魔．次いで「変身」の場面へ移るわけであるが，このやりとりは前二稿では，結末近く，「奴らは行ってしまったぞ．」と叫ぶ悪魔の難詰，そして心弱く「そうだな．」とつぶやくのみのアントワヌに，≪論理≫がこうつめよる箇所を思いおこさせる．

≪そうなんだよ．奴らがみんな行ってしまったからには，お前の神も……[14]≫

すべての宗教権威の失墜は，キリスト教にまで及ぶことを暗示するこの直接的言及は，決定稿には欠如しているが，≪後には何が残るというのでしょ

う？≫と言うアントワヌの嘆きは，上に引用した≪論理≫の詰問に対する答えともなっているように思われる．この微妙な類似から考えて，問題の断片は，決定稿第五章に置かれていたと推定するのが妥当であるように思われる．

このように考えると，このエピソードが表わしている意図は，徹底したキリストの敗北の図を描くことであったことが了解される．そしてこの文章を読めば，補註者が言う通り，≪宗教的良心への配慮≫による削除という理由も十分首肯できるであろう．

ルイ・ベルトランも，先に上げた，この断片に関する文章を「フローベールの宗教的配慮」と題している（プレイアード版の註は，これに準拠したものであろう．）が，彼はその論拠として，作家の愛姪カロリーヌの語る証言を紹介している[15]．それによれば，彼女自身フローベールがこの断片を朗読するのを聴いたが，ルナンの『イエス伝』(1863) のひき起した筆禍事件を目撃していた作家自身が，信者，教会との悶着を厭い，裁判沙汰に巻き込まれるのを恐れ，このエピソードを決定稿から削除したというのである．

ベルトランも，全面的には信じ難いといった調子でこの証言を紹介した後，彼自身の結論は，削除の論拠を専ら作家自身のモラル，つまり彼の美学への誠実さに帰している．『聖アントワヌ』決定稿を≪厳密なまでに客観的で没我の作品≫とするこの評論家にすれば当然のことであろうが，彼は，フローベールが作品の中で結論を下すことを忌み嫌っていたことに，その理由を見い出そうとする．

> ≪フローベールの手法が，ゾラのそれと対立するのは，とりわけこの点である．彼は非常に雅量のある，そして慎重な精神を持ち合わせていたので，『ルールド』や『ローマ』の作者のように，不用意な否定や断定に自ら飛びつくことはなかった．[16]≫

つまり，この場合の宗教的配慮とは，フローベールという大作家の≪レアリスム≫理論に基くと共に，彼の精神の高潔さに起因するものであると主張しているのである．

しかし，削除の理由は本当に≪配慮≫によるものであろうか．確かに，決定稿では，前二稿に見られた数々のエピソードが削除修正されている．そしてそ

の多くのものは猥雑さを排除するためであったが，例えば，その中には，到底カトリック信者が黙過できないであろう聖母マリアの姦淫のエピソードのような異端の説の修正[17]が含まれている．そうした削除，修正の全体的な方向と考え合せるなら，このあまりにも激しいキリスト冒瀆の図の削除も，しごく当然と思われる．

しかし，フローベールが意図した決定稿は，結果の良悪にもかかわらず，≪ドラマの糸≫を見つけることにあり，削除，修正は全てこの意図の実現のためであった事を思いおこそう．それは，ベルトランの言うような≪レアリスム≫に根ざした美学ではなく，フローベールにとっては新しい美学に基いたものであったのだから[18]．

しかも，これらの≪宗教的配慮≫によって，敬虔なキリスト教徒を傷つけないことが，果して可能であろうか．古来，いわゆる≪誘惑≫のドラマは，キリスト教顕揚と冒瀆の微妙な狭間で展開されるのであり，冒瀆的な要素も，≪最後に聖者が誘惑に克つが，この勝利はおそるべき代償の果てに得られた[19]≫という印象を際わ立たせるためのものであった．しかし，フローベールの『聖アントワヌ』にあっては，この微妙なバランスが保たれ得ていないのは一目瞭然である．この作品の系列に属する全ての習作に共通する悪魔の哄笑が，圧倒的に印象深いからである．ヴァレリーが指摘する「ドラマの希薄」[20]のよってくる由縁である．

その場合，一般読者の反応は明らかであろう．実際，このバランスを欠いた作品は，フランスでの雪崩のような悪評に加えて，ロシアの検閲によって，反宗教性の故をもって発売禁止処分に付されてしまったのである．

≪全ロシアを統べる皇帝陛下の検閲委員会は，宗教に害を加えるものとして，『聖アントワヌ』の翻訳を禁じ，仏語版の販売さえ許可しなかった．このため，「サン＝ペテルスブルグ誌」が私に支払うことになっていた二千フランがふいになったし，仏語版同様，翻訳本によって得られたであろう二，三千フランも駄目になるだろう．

つまり，達観した人間になる必要があるわけだ．[21]≫

これはツルゲーネフの勧めと尽力によって実現しようとした計画であっただ

けに，フローベールを大いに落胆させたのであるが，経済的理由を嘆いてみせるこの手紙の調子は，≪反宗教性≫という烙印を笑うべきものとしており，彼のそうした懸念に対する腐心が水泡に帰した事を嘆いたりはしていない．又当事者であるツルゲーネフに対して，≪あなたは『聖アントワヌ』に言及され，これは一般読者向きではないと言っておられます．私もそのことは予期していましたが，選ばれた人々からはもっと理解されるものと考えていました．[22]≫と書いた時，俗な意味で≪反宗教性≫をとがめられることを承知していながら，それ以上にこうした危険を抱えたままでも，表明せずにはやむことのできないものを，この作品に塗りこめたのだと理解する方が妥当であろう．

それ故，このエピソードの削除は，先に述べたように，作品自体の持つ内的要請（美学）に基づくものである．この点については既に分析を試みたが[23]，ここでは，この削除の結果現われた作品構成上の配慮を，決定稿に初めて登場した人物≪仏陀≫によって見てみよう．

≪1849年の作品と比べて，1874年の『誘惑』に利用された新しい重要な書物といえば，唯ヘッケルのものがあるばかり[24]≫というチボーデの指摘にもかかわらず，この新しい人物のためフローベールが『妙法蓮華経』まで読んで，仏教研究に打ちこんでいることが知られている[25]．

さてその仏陀をして語らせるところのものは，イラリオンが差しはさむ解説が示すように，処女懐胎による誕生，幼時の天才ぶり，誘惑との戦いである修業，そして万民救済のための生活と，イエスの生涯と重ね合わせることのできるその一生の描写である．

そして更に，仏陀が，

> ≪そして今，この最後の生活の中で，法の道を説き終えた上は，もはや成すべきことは何一つない．（……）すべてが今や死にたえてゆくのだ．そして新しい誕生の時まで，すたれ滅びた世界の廃墟の上には，一つの焔がおどり狂っているであろう．[26]≫

と叫ぶと，彼に従っていたすべての神々は，よろめき，けいれんして倒れ，自分たちの生命を吐き出してしまうこのエピソードの結末は，削除された『郊外のキリスト』の雰囲気を薄めた形ではあるが，伝えているであろう．こうした

配慮を考え合わせるなら，この場面を解説してイラリオンが，≪今ごらんになったのは幾億の人々の信仰ですよ.≫ と勝ち誇ったように言う時，誰しもそこにキリスト教の運命を見るだろう.

問題のエピソードは，≪大いなる周期は完了した.≫ と言う仏陀の言葉にその意味するところを託し，決定稿第五章から削除されたのだと理解できそうである.

Ⅳ

以上一つの草稿の削除をめぐって推論を続けた結果，そこに見い出されたのはフローベールのキリスト教観である．かつてこの作家は，≪私は人生を憎みます．私はカトリック教徒です.[27]≫ と語ったが，この証言を文字通り受けとるならば，アンリ・ギユマン[28]のように，この『聖アントワヌ』決定稿を，フローベールが神に近づいた作品と見なしうるであろう．しかしここで見たように，決定稿においてアントワヌの見るキリストは，作品構成にのっとって理解されるべきであろう.

つまり，先のカトリック教徒であるという証言も，≪人生を憎む≫という条件を踏まえてである点を重視しなければならないだろう．そして，実際のキリスト教に関する認識は，どうやらこの削除された草稿にこめられていたもの，すなわち仏陀をして≪大いなる周期は完了した.≫ と言わしめたものであろう.

彼の時代におけるキリスト教の失権という現実は，≪そのドグマを一つ一つ取り出すと嫌ですが，そのような宗教を創り出した感情を，私は人類社会の最も自然な，最も詩的なものと考えます.[29]≫ という宗教観でみる時，次のような結論にならざるをえないであろう.

> ≪ああ，何という世界に私達は入って行くのでしょう．多神教，キリスト教，俗物教，これが人類の三大進化です！悲しいことには，私達は第三の時代の初めにいるのです.[30]≫

これは，パリ・コンミューンを目撃しての言葉であるが，ここに言う≪俗物教≫ *muflisme* こそ，彼が生涯対峙して行く≪愚劣さ≫の謂であり，そうした

世界で自らを≪カトリック教徒≫と考えた時，それは失われた前の時代の「絶対」を渇望する作家の業の表現である．

この≪俗物教≫の現実の中で，キリストに仕えることを職業とするものの姿は，ブルニジャンやジュフロワでしかないのであり，あえてこの現実の中で神を信ずるものは，フェリシテのように，オオムという異形の神にしかそのやすらぎを見い出しえないかのようである．

フローベールの不幸は，医学者の家庭からうけた反宗教的雰囲気にあり，キリスト教の衰微した世界に生きねばならなかったことにあったのだ．

> ≪信仰というものが，いずれにせよ無さすぎるのです．私達は正にでたらめな時代にこそいるのです．ごまかして暮せない私達にとっては，全く不幸な時代です．[31]≫

この意味で『聖アントワヌ』決定稿とは，ラ・ヴァランドの表現を借りるなら，キリスト教に捧げられた≪暗い火のような詩≫であることが理解されるだろう．

注

1）Albert Thibaudet : *Gustave Flaubert*, p. 180.

2）拙稿：≪La Tentation de Saint Antoine≫ の空白（1856—1870），『待兼山論叢』第四号参照．

3）Flaubert : *Œuvres*, tome 1, pp. 1053—1055.

4）"*La danse des morts*"，筑摩版邦訳全集第6巻参照．

5）"*La Tentation*", *éd*. Conard, p. 201.

6）筑摩版邦訳全集第4巻において，訳者平井氏は，この草稿を結末と見て解説を試みておられる．

7）Louis Bertrand : *Gustave Flaubert*, p. 137.

8）*La Tentation*, pp. 166—167.

9）例えば「十字架」の現われる場面について，いろいろ苦労していることが知られているからである．

10）Jacques Madeleine : *Les différents ≪états≫ de ≪La Tentation de Saint Antoine≫*, R. H. L. F., 15e ann., p. 635.

11）George Sand 宛書簡，1873年5月25日～31日付参照．

12）A. Thibaudet : op. cit., p. 186.

13) *La Tentation*, p. 166.

14) ibid., pp. 485—486. et p. 644.

15) L. Bertrand : op. cit., pp. 139—140.

16) ibid., p. 143.

17) *La Tentation*, p. 215. 決定稿 (p. 70) では，この Panthérus との情交の場面は，極端に薄められている．

18) 本註 2) に掲げた拙論参照．

19) ラ・ヴァランド：『フローベール』(永遠の作家叢書)，p. 93.

20) Paul Valéry : La tentation de (saint) Flaubert, dans *Variété*, V.

21) 姪 Caroline 宛書簡，1874年 2 月付．

22) Tourgueneff 宛書簡，1874年 7 月 2 日付．

23) 本註 2) に掲げた拙論参照．

24) A. Thibaudet : op. cit., p. 180.
ヘッケルの『自然創造史』(1868) と思われるが，この根拠を寡聞にして知らない．

25) Ernest Feydeau 宛書簡参照．これは，ルナンから借用したものである．

26) *La Tentation*, pp. 127—128.

27) Louise Colet 宛書簡，1853年12月14日付．

28) Henri Guillemin : *Flaubert devant la vie et devant Dieu*. 参照．

29) Mlle. L. de Chantepie 宛書簡，1857年 3 月30日付．

30) G. Sand 宛書簡，1871年 3 月11日付．

31) Mlle. L. de Chantepie 宛書簡，1868年 1 月24日付

書　　誌

A) テキスト

(1) Flaubert : *Œuvres*, tome 1, Bibliothèque de la Pléiade, 1951.

(2) *La Tentation de Saint Antoine*, avec Appendice (versions de 1849 et de 1856), L. Conard, 1924.

(3) *Les Œuvres et la Correspondance de Gustave Flaubert*, en 18 vols, Rencontre, 1964—1965.

B) 参考書

(1) Bertrand, Louis : *Gustave Flaubert*, Mercure de France, 1912.

(2) Guillemin, Henri : *Flaubert devant la vie et devant Dieu*, Nizet, 1963.

(3) Madeleine, Jacques : Les différents ≪états≫ de ≪La Tentation de Saint Antoine≫, dans *Revue d'Histoire littéraire de la France*, 15e année, pp. 620—641.

(4) Thibaudet, Albert : *Gustave Flaubert*, N. R. F., 1935.

(5) ラ・ヴァランド：フローベール（永遠の作家叢書）山田爵訳，人文書院，昭和32年.

(6) 平井照敏：フローベール全集第4巻（聖アントワーヌの誘惑・三つの物語）巻末解説，筑摩書房，1966.

（M. 44. 天理大学講師）